言語課題と非言語課題における音楽の無意図的想起

鈴木郁生

(青森公立大学)

キーワード: 音楽、無意図的記憶、歌詞

Involuntary musical recollection during linguistic or non-linguistic tasks

Ikuo SUZUKI

(Aomori Public University)

Key Words: music, involuntary memory, lyrics

目的

自分の意図とは関係なく、音楽が自然に頭に浮かんでくることがある。これを音楽の無意図的想起 (involuntary musical recollection) あるいは無意図的音楽イメージ (involuntary musical imagery) と呼ぶ。本研究では、音楽の無意図的想起が、作業の性質によって影響を受けるかどうかを実験的に検討する。Hyman et al. (2013) は、認知的負荷が低い時、そして逆に高い時に音楽の無意図的想起が生じること、非言語よりも言語課題に従事しているときに無意図的想起が減少することを示した。本研究が特に注目するのは、想起される音楽が歌詞を伴うかどうかである。想起時の活動が言語処理に関わるものか否かで、想起される音楽に歌詞が伴うかどうかが変わる可能性がある。鈴木 (2012) は日誌法を用いた研究の結果、言語を伴う活動に従事しているときには、想起される音楽は歌詞を伴うことが少ないことを示した。本研究は Hyman et al. の実験手続きを基として、参加者に言語処理あるいは非言語処理に関わる作業に従事してもらい、課題中に生じる音楽の無意図的想起の程度を測定した。

方法

参加者 大学生 42 名。言語課題条件群と非言語課題条件群の 2 群に分かれた。

刺激 提示する曲として「世界に一つだけの花」「恋するフォーチュンクッキー」「となりのトトロ」を選定し、それぞれの 1 番のみを 6 回繰り返すよう編集した。編集後の曲の長さは約 10~12 分であった。

手続き 実験に関する教示の後、参加者にヘッドホンを装着してもらい、選定した 3 曲のうち 1 曲を提示した。音楽聴取後、「知っている曲だったか」「どのくらい好きか」を質問した。その後、条件群ごとに作業課題を行ってもらった。言語課題条件群の参加者が従事した課題は、フラグメント単語完成課題である。参加者は、提示される単語フラグメントの空欄に平仮名を一文字だけ当てはめて、時間内に出来るだけたくさんの単語を完成するよう求められた。非言語課題条件群の課題は迷路課題である。参加者は、スタート地点からゴールまでを鉛筆で辿って時間内に迷路を解くよう求められた。課題は 10 試行あり、1 試行は 30 秒の作業と 30 秒の休憩時間からなっていた。全ての試行が終了した後、実験課題を行っている最中に、音楽が無意図的に流れてきた時間を全体の何%だったかをもとに回答した (全想起時間)。そして、全想起時間を 100 としたとき、課題を行っているときに想起された時間 (作業中想起時間)、休憩中に流れた時間 (休憩中想起時間) の比率をパーセントで回答した。同様に、流れた音楽がメロディーのみだった時間 (歌詞なし想起時間)、歌詞があった時間 (歌詞あり想起時間) の比率をパーセントで回答した。最後に参加者の音楽経験や日常的な無意図的想起頻度等についても回答を求めた。提示される曲の種類は、参加者間でカウンターバランスがとられた。

結果

全想起時間に対する t 検定の結果、音楽経験のある参加者は、音楽経験の無い参加者に比べ無意図的な音楽想起が多い傾向があった ($t(40)=1.975, p=.055$)。ただし、全想起時間と、音楽経験の年数、日常音楽を聴く時間の間にはそれぞれ有意な相関が認められなかった ($r=.252, p=.108; r=.117, p=.459$)。また、参加者の日常的な音楽の無意図的想起の頻度評定と全想起時間の間の相関は有意傾向であった ($r=.267, p=.087$)。

実験中に音楽の無意図的想起が生じなかった参加者を分析から除き、歌詞あり想起時間に対する t 検定を行った。その結果、課題の種類が有意であり ($t(31)=2.081, p=.046$)、言語課題に比べ非言語課題では音楽の想起時間が多いことが示された。また、推定値を 50 とした 1 サンプルの t 検定を作業中想起時間に対して実施した有意な差が認められ、作業中よりも休憩中に音楽想起時間が多いことが示唆された ($t(32)=-7.280, p=.000$)。

考察

本実験の結果、言語課題に従事している時に比べ、非言語課題言語課題に従事しているときには、歌詞を伴う音楽が想起されることが多いことが示された。これは言語課題によって言語処理が干渉され、歌詞という言語情報の想起が抑制されたのかもしれない。また、課題を行っているときよりも休憩時に想起されることが多いことから、認知的負荷が小さいときに無意図的想起が生じることが示された。質問紙による日常的な音楽の無意図的想起頻度と実験的に生じた無意図的想起の関係については今後の検討が必要となるだろう。

引用文献

Hyman, Ira E., Burland, Naomi K., Duskin, Hollyann M., Cook, Megan C., Roy, Christina M., McGrath, Jessie C., & Roundhill, Rebecca F. (2013). Going Gaga: Investigating, Creating, and manipulating the song stuck in my head. *Applied Cognitive Psychology*, 27, 204-215.

鈴木郁生 (2012). 日常における音楽の不随意的想起 東北心理学研究 62, 31.